

## 巻頭言

# 自由保育は学級崩壊の元凶か

秋山 和夫

小学校における学級崩壊が深刻な問題になってきている。学級崩壊というのは、子どもが教師の指導に従わず勝手に席を立って歩き回ったり、奇声を発したり、騒いだりして授業にならない状態をいう。

この学級崩壊が起きた理由は単純ではなく、決定的な原因の提示は難しい。多くの論者がさまざまな仮説を提示している。

その中に「学級崩壊は自由保育が一因」というものもある。要するに、幼稚園や保育所の自由保育によつて育てられた幼児が小学校に進学した場合に、集団の規律に従うことができず、勝手気ままな行動をとるようになるという考え方である。

こうした考え方は、小・中学校の教師の間にも皆無ではない。「具体的な活動や体験を通して」学習



を行う小学校の生活科を学習してきた中学生は落着きのない子が多く、教室がざわつき、学校のルールが守られにくい。こうした生活態度の面で、生活科以前の中学生と比して、大きな差が見られると公言する中学校教師も少なくない。

生活科は、主体的、自発的な活動を大切にする幼稚園教育と、教育方法、教育内容面で深い関係を持つている。幼・小一貫をすすめるためのステップとして生活科は成立したのである。

このため、幼稚園の自由保育と生活科は同罪であると考え、小・中学校教師の存在を見逃すことはいかない。

幼稚園の自由保育が学級崩壊の一因であるという指摘を一笑に付すわけにはいかない。その理由は次の二つの点にある。

その第一は、幼児期に形成された人間の行動様式や習慣は、以後の人生に大きな影響を及ぼすという考え方である。幼児期は人間形成にとって極めて重

要な時期であり、人間は教育されることによって始めて人間としての生活様式を身につけることを考えれば、幼児期にどのような行動様式、生活態度を形成していくかということは、真剣に考えなければならぬ問題である。

第二は、幼稚園・保育所において自由保育の考え方が正しく理解され実践されているかについての問いかけであるとも考えられる。

「幼児の主体的な活動」「幼児の自発的活動としての遊び」「幼児一人一人の特性」といった語句が正しく理解されて実践されているかどうかといった観点から、幼稚園の実践を点検する必要がある。

かつて、幼稚園では教師の役割は「指導」ではなくて「援助」でなくてはならないとか、「環境を通しての指導」が大切であるといった考え方の中で、教師が幼児に指示や命令を与えることは良くないことであるとか、教師は後に退いて幼児の活動を見守ることの大切さが強調された。

たしかに、これらの考え方自体は誤りではない。しかし「自主的な活動」や「主体的な活動」が放任になったり「幼児一人一人の特性」の尊重が子どものがままや身勝手を許容することになっていないかどうかの点検も必要なことである。

「一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させる」ことを大切にすることは当然のことであるが、グループの活動や学級全体での活動の中における個々の幼児の興味・関心の持ちようとの関係をどう考えていくのかといった点についての十分な検討も必要である。

「指導が始まって座らない児童に担任が再三注意をしても聞きません。『やだもん、だつて座りたくないんだもん』。親に連絡したら『うちの子はいすが嫌いなんです。そのままにしておいて下さい。』

〔朝日新聞〕一九九九年五月十日「読者の投書から」

このような実態に対して、教師はどう判断し、ど

う対処していくかということが大切である。これを一人一人の興味・関心の特徴として許容すべきと考えるのか、人間としての行動様式や生活態度の未熟さと考えていくかということである。

人間は学習によってのみ人間らしくなると言われる。歩行、コトバ、排便の様式などに代表されるように、幼児期に身につけさせておかねばならない能力や態度は少なくない。

幼児に自由を保障してやることは大切なことである。しかし、無条件の自由というものはありません。大相撲名古屋場所が終わったばかりであるが、力士は土俵という限定された場の中で、創意工夫をこらして自由に立ち回り相撲をとる。何を限定し、何を自由に行動させるかということを保育の場で考えてみるのも、自由保育のあり方を豊かにしていくための切り口ではないか。

(山陽学園大学)